The Good Samaritan の提起する諸問題

印　藤　京　子

I

統計によれば、英国では79分に１人の割合で自らの命を絶つ者がいる。[1] 交通事故による死者の２倍である。また、自殺未遂者数はこの20数倍で、これはヨーロッパで最悪である。[2] 特に青少年の自殺ならびに自殺未遂が多い。しかし、弱者に厳しい世間、個人を自殺に追い込む側面のある社会は、英国に限ったものではない。我が国でも年間の自殺者数が、昨年まで３年連続で３万人以上に上っている。[3] これは、交通事故による死者の約３倍である。ことにここ数年、40歳台、50歳台の自殺者が激増している。長引く不況の影響による倒産、リストラ、借金などで追いつめられたためと思われる。折しも先日、働き盛りの父親が自殺し、遺児となった学生10名が首相官邸を訪れて、小泉純一郎首相に自殺防止対策ならびに切り捨てられた人たちの救済策を進めるよう訴えた、というニュースが報じられた。[4] 若者の自殺者が目立つ英国と、中年の自殺者の多い我が国では、自殺の引き金となる要因に違いがあり、そのため国による防止対策・救済策は当然異なるものであろう。しかし、死を思う人が、社会的に孤立しているということに変わりはない。The Samaritans は、そのような孤独な彼らの心のうちを受け止める、市民によるボランティア組織の１つである。

現在、世界各地で非常に多くのボランティア団体が、幅広い分野で活発に活動している。日本国内でも、さまざまな市民ボランティア団体が、福祉、環境、国際交流などを通して住みやすい共同体を作りあげようとして

いる。また、個性や価値観が多様化し、複雑で様々な問題を抱えている現代社会において、手法は異なってもボランティアとして社会参加することによって、他者を認めて共生する豊かな心を育み、よりよい人生を送ることが奉仕活動の１つの重要な意義となっている。そこで本論では、自殺という現代の社会問題を市民救済者の視点から劇化した *The Good Samaritan* を取り上げ、The Samaritans の成り立ちならびに作品のあらましと上演の模様を紹介し、作品の提起する諸問題について考えてみたい。

II

作者は俳優として活躍中の David Haig である。[5] 彼は、1997年に *My Boy Jack* を発表して劇作家として名乗りをあげている。それから３年、*The Good Samaritan* は彼の２作目である。デビュー作は、第１次世界大戦で息子を失った作家 Rudyard Kipling の体験をもとに書かれたものであったが、２作目は自らの体験をもとにしたものである。David Haig が1980年代に５年間奉仕活動をした The Samaritans は、自殺予防を目的として設立された、ボランティアによる電話相談事業である。団体の名前は、聖書の「ルカによる福音書」にある The Good Samaritans（よきサマリア人）の教えに由来する。[6] Neighbour（隣り人）の定義について問われたイエス・キリストが、追いはぎにあって服を取られた上に殴られて身動きできなくなった旅人を、あるサマリア人だけが近寄って手厚く介抱した、と語るくだりである。命名者は、初潮を梅毒とまちがえて自殺した１人の少女への悼みから、１人でも自殺者を減らそうと、長年にわたって青少年を対象としたカウンセリングを行っていたイギリス国教会の牧師 Chad Varah である。

Chad 牧師はロンドンにある聖ステファン教会に赴任するにあたり、精神的孤独や危機にある人々を対象とするカウンセリングに本格的に取り組むこととし、1953年11月２日電話による対話を開始した。今日では国際的な組織となった電話相談の源流がここにある。当初は Chad 牧師と秘書の２

人だけで対応していたが、その後、人選されたボランティアが、Chad 牧師のもとに押しかける人々が面談を待つ間の応対をするようになった。その際、ボランティアたちの暖かい眼差しや、やさしい語りかけをきっかけに、順番待ちをする人々が彼らに自分の苦しみや悩みを打ち明けるようになり、その結果、心の内を誰かに聴いてもらって吐き出すことで問題の多くが解消されていくことを悟った Chad 牧師は、彼らを Samaritans と称してすべてのカウンセリングを委ねた。1954年２月２日のことである。[7]よき隣人として支援するボランティアたちの行為ーbefriending（よき友人となること）ーを基調とするこの運動は、その後ヨーロッパ各地に広まり、1974年には、Chad 牧師によって Befrienders International が設立された。

一方、自殺予防を目的としたもう１つの相談事業に、Lifeline（いのちの綱）がある。こちらは、1964年３月に Alan Walker がシドニーではじめたもので、その後オセアニア地域に広まった。前述の The Samaritans とこの Lifeline が原点となって、自殺予防を目的とする電話事業は世界各地に広がり、国際緊急援助連盟が組織された。なお、日本では1969年にドイツ人宣教師の提案で電話相談機関の設置が準備され、1970年の Walker の来日を契機に委員会が結成され、翌年10月１日に最初の「いのちの電話」が東京に開局した。現在では、全国各地で開局している。

Ⅲ

David Haig の *The Good Samaritan* は、2000年７月６日に幕を開けた。上演劇場は、デビュー作 My *Boy Jack* と同様 Hampstead Theatre、演出も同じく John Dove、舞台美術は Laurie Dennett である。[8]２幕構成で、第１幕は４場、第２幕は３場から成る。登場人物は女５人（内少女１）、男３人。

第１幕は場面転換がなく、暗転で数週間の時の経過が暗示される。場所はロンドンの中心部にある Samaritans 事務所。二分された舞台の2/3を事務室が占めている。事務室には、それぞれ電話の置かれた机が４つ配置さ

れ、舞台奥の壁にはファイルの並べられた棚がある。上手の一角が壁で仕切られ、事務室とドアでつながっている別室を構成している。別室には、観客席と並行にベッドが設置され、その手前に椅子と小さなテーブルがある。別室は、面談室兼簡易宿泊施設となっている。雑然としている事務室と、簡素で整頓された面談室とが好対照をなしている。常時舞台全体で演技が進行するが、事務室と面談室の照明の強さを調整することで、必要に応じて二分された舞台の一方に観客の注意を集中させる工夫がなされる。

１幕１場　Samaritans 事務所。早朝。

面談室で一夜を明かした青年 Peter が Rachel に起こされる。彼は現在失業中で、今日も家に帰ってから職安に行く予定である。しかし、どことなく帰宅を躊躇する様子がうかがえる。Samaritan 歴20年の Rachel は、追い立てたりはしない。スニーカーを枕の下に入れるという彼の突飛な行動にも口を挟まず、ベッドのシーツをゆっくり時間をかけて整えるのを見届け、常備薬を持たせて優しく彼を送り出す。

事務室では、若い Jenny、年配格の Muriel、そして Rachel の夫 Alan が電話の応対に忙しい。Jenny は無言電話と格闘している。語りかけることばは穏やかだが、苛立ちは隠せない。時折席を立ち、鬱積した感情を吐き出して、気持ちを鎮めている。Muriel の相手は、おかまの Simon。彼は Louise と呼ばれることを望んでいる。Jenny とは対照的に、こちらは話が弾んでいる。Muriel は、いかにもベテランといった感じで、ひたすら相手の気持ちに寄り添って聴いている。女装が趣味の Louise と女性用下着について意見交換をし、一度面談に来ないかと誘っている。Alan の相手は George。英国諜報部に監視されているという妄想に取りつかれていて、すでに何度か電話をよこしている。ひっきりなしにかかってくる電話の合間に、専門医への連絡、情報交換、ファイルの整理と、皆休む暇はない。その忙しさと呼応して、観客の注意もめまぐるしく移動する。各登場人物が、一斉に観客の注意を求めて競い合うため、注意の領域が広く、焦点が定まらない。

それぞれ独立したやり取りが四方八方から行き交う、台詞の交差点といった出だしである。

そこへ、若いCarolがやって来る。ロンドン訛りが強く、すさんだ生活を感じさせる。女性相談員との面談を希望するが、あいにく手の空いているのはAlanだけである。労働者階級のCarolは、エリート然としたAlanに対する敵愾心を剥き出しにする。タバコが吸いたいと言ってポケットに手を突っ込み、取り出したナイフをAlanに向ける。予想外の行動にAlanは驚き、後ずさりする。ナイフを見つめたまま、ことばが出ない。観客の目も、冒頭の広角レンズから接写レンズへと変わり、Carolが手にしたナイフにその焦点を合わせる。Carolは、ひるむAlanをからかった後、ナイフの持込みは規則違反のはずだから預かって欲しいと頼む。相手を自分のペースに巻き込むことがうまい、興味を喚起する主人公の登場である。

Carolは、生きることに疲れている。7歳の娘Tracyを抱えて公営アパートで暮らしているが、何もかも終わりにしてしまいたいという思いと、Tracyを1人残しては死ねないという思いの間で逡巡する毎日である。コカインの密売をしていた夫は、身重の彼女を乗せて運転している時、警察に追われて交通事故を起こし、死亡している。吐き捨てるように語るその時の状況は痛ましい。一方、対するAlanは、40歳、結婚20年で子供が3人、夫婦仲よくボランティア活動をしている。最近、広い庭のある新居に引っ越したばかりの、生活にゆとりのある中産階級である。精神的にも経済的にも異なる世界に住む2人だが、音楽好きという共通項が見つかり、垣根を1つ乗り越える。もっとも、Alanのお気に入りはBob Dylan、CarolはOasisである。Murielの場合とは異なり、相手の気持ちに寄り添うのはCarolの方である。Bob Dylanに興味を示してAlanの気持ちをなごませ、豊胸手術をしたという自慢の胸に話題を移す。目のやり場に困るAlanを冷やかし、人に見てもらうために金をかけたのだと主張して、しっかり見るように命じる。

１幕２場　Samaritans 事務所。数週間後。

女装した Louise が、勇を鼓して面談に来ている。内緒で借りた母親の服は、お世辞にも似合うとは言えない。Muriel を待つ間に化粧を直し、身づくろいをする。そのしぐさに内心の不安と緊張が見て取れる。Muriel に暖かく迎えられ、２人はごく自然に化粧品談義に花を咲かせる。得意げに話す Louise。不安と緊張の取り除かれた Louise は、恋する男性に気持ちを打ち明けられない切ない胸の内を吐き出す。Muriel は、幼子をあやす母親のように優しく、その思いを受け止める。Muriel に促されるまま、Louise は彼女の膝に顔を埋めて泣く。その拍子に Louise のかつらがずれ、観客席から笑いが起こる。Muriel に慌てる様子はない。一瞬の間が、興味津々で固唾を呑んで見守る観客の注意を、Muriel の手元に釘づけにする。Muriel は、黙ってゆっくりかつらを取り外し、あらわになった坊主頭をそっと撫でる。Muriel の一連の動作によって、指標であったかつらに象徴的な意味合いが加わり、単純な笑いがペーソスを含む笑いに転じる。異化効果を利用した、巧みな趣向である。ライトが溶暗し、観客の笑いも消える。

面談中の Carol と Alan が溶明するライトに浮かび上がる。[9] 内気で感傷的な Louise とは対照的に、Carol は奔放で明るい。夫との楽しかった性生活をはつらつと語る。[10] しかし、その回想は、満たされない現実の裏返しに過ぎない。次第に明るさが影をひそめ、娘 Tracy との生活では癒されない寂しさを Alan に訴える。そして、Bob Dylan の歌をもう１曲教えて欲しいと甘え、ぬくもりを求めて Alan ににじり寄る。タバコに火をつけ、Alan に手渡し、溶暗するライトの中で、歌詞を書いている Alan をじっと見つめている。

１幕３場　Samaritans 事務所。数週間後。

面談室で、Peter が昨晩使用したベッドを念入りに整えている。相変わらず、スニーカーは枕の下である。無用の饒舌が内心の不安を物語る。不安の原因は、今日予定されている母の訪問である。しかし、その不安も

Jenny に話すことで解消し、励まされて出て行く。

事務室では、電話の鳴らない一時の平穏を利用して、Rachel と Alan が新居の台所について話し合っている。そこへ、Carol が再度 Alan に面談を求めてやって来る。Jenny は、同じ相談員と繰り返し面談するのは Chad 牧師の定めた The Samaritans の規則に違反するとして、Alan が面談することに反対する。Rachel も同意見である。当の Alan は無関心を装う。険悪な雰囲気を察した Muriel が、自ら面談を申し出てその場をとりなす。Muriel の申し出を受け入れたものの、Alan は電話が鳴っても出ようとしない。ベルの回数が、Alan の不満の大きさを象徴する。

面談室で、ふてくされた Carol を相手に Muriel が心を砕いている。しかし、あくまでも Alan との面談を希望する Carol には、Muriel の優しさも鬱陶しいだけである。Muriel の奮闘もむなしく、Carol は向かっ腹を立てて事務室に怒鳴り込む。

電話中の Alan は、相手が興奮しているのか、しきりと宥めている。Carol の入室に伴って次第に声高になり、その口調もきつくなる。Carol に視線をあてたまま電話口に向かって発せられる台詞は、激しい見幕で Rachel に食って掛かる Carol に向けられたもののように響く。Alan が早々に電話を切り、２人の間に割って入ると、Carol の態度は豹変する。哀れっぽい声で Alan に面談をせがみ、渋い顔をする Rachel を尻目に了解を取りつける。警察を呼ぶべきだと主張する Rachel を振り切って、Alan は面談室に向かう。

面談室のベッドにしょんぼりと座って、Carol が Alan を待っている。先ほど見せた荒々しさはない。入って来た Alan に抱きつき、涙声で自殺をほのめかす。Alan がそっと背中に手を置いた途端に、Carol は衝動的に彼の肩に噛みつく。思いがけない反応に動揺する Alan に、Carol は涼しい顔で、読んで欲しいと１通の手紙を差し出す。娘 Tracy に会いたいという、交通事故で死んだはずの夫からの手紙である。釈然としない Alan が説明を求め

ると、自分にとっては死んだも同然とうそぶく。そして、交通事故のあと、行方をくらました身勝手な夫は自分の人生から抹殺したと開き直る。Alan が納得すると、Tracy に会って欲しいと訴え、近くの公園を指定する。Alan は規則を盾に拒むだけで、毅然とした態度がとれない。そんな Alan の耳元で、Carol はささやくように歌いだす。Oasis の歌である。なまめかしい息遣いが Alan を誘惑する。

状況報告という名目で、Alan は一旦事務室に引き上げる。Carol との張りつめた空気からは開放されるものの、事務室で彼を待つのは Rachel との気まずい雰囲気である。Rachel は、いたって事務的に、今後は規則通り別の人が Carol と面談することを伝える。はじめのうちこそ無頓着を装う Alan だが、Carol が組織ではなく Alan 個人に助けを求めていることを指摘されると、冷静さを失う。これまでに築き上げた自分との信頼関係が Carol の救いとなっていると力説し、自分でなければだめだと反論する。Carol の歌に魅了されたのか、その語気は荒い。しかし、逆に思い上がりを指摘され、Rachel の決定を覆すことはできない。

この決定を Carol に伝えるために Alan は面談室に戻るが、なかなか言い出せない。規則を先刻承知している Carol は、言いよどむ Alan につけ込んで、公園で落ち合う話を何食わぬ顔で進める。ようやく、Alan が申し訳ないと言いつつ、今後の方針を伝えると、Carol はそれまでの甘えた態度を一変させ、'You're all the same. Do-good wankers. You don't give a shit. You come here, puff yourselves up, then go home well pleased with yourselves.' 「あんたもみんなと同じなんだ。みんな独り善がりの、いい子ぶりっ子なんだ。あたいらがどうなろうと、知ったこっちゃないんだよ。善人面してここに来てさ、ちょっといい気分になってさ、そんで自己満足して家に帰るんだよ。」(49) とまくし立てて面談室を飛び出し、事務室に向かって 'Wankers' と大声で怒鳴って立ち去る。

面談室に残された Alan を気遣って Rachel が入って来る。Carol の自殺を

危惧するAlanは、たとえ自殺したとしてもそれは仕方のないことで誰の責任でもない、とするRachelの醒めた見方に納得できない。Carolに目が眩んでいるためではないかとRachelにただされると、今回の決定には嫉妬が絡んでいると逆襲する。しこりを残したまま、２人は電話のベルに促されて事務室へ向かう。

１幕４場　Samaritans事務所。数週間後。

４人とも電話の応対に忙しい。切るとまた鳴るといった状況である。常連のGeorgeが相手のAlanは、10分だけと相手に伝えてあるが、なかなか電話を切らしてもらえない。半ば強引に切ったところに、Alanを指名した電話が入る。すぐ近くの公衆電話からかけている、ろれつの怪しいCarolである。鎮痛剤を飲んだことを聞き出すと、Alanは救急車の手配を頼んで飛び出して行く。慌てふためくAlanとは対照的に、救急車を呼ぶMurielは落ち着き払っている。Jennyが傍らに来て、Carolの電話は助けて欲しいという意思表示であるかどうかをMurielに確認する。本人の承諾なしに救命処置はとらないとするThe Samaritansの規則を気遣っての問いかけであるが、Murielは答えない。Jennyは話題を変え、つい今し方受けた電話が、さんざん話した挙句に、いたずら電話だと判明したことを悔しそうに語る。やっていられないと憤るJennyに、たとえ本当に助けを必要としている電話が半分であってもこの事業の意義はある、とMurielは諭す。Jennyは、納得はするものの、無言電話やたちの悪いいたずら電話ばかり相手にしていると、まともに聴く能力がそがれると嘆く。そこへ、Carolを抱きかかえるようにしてAlanが戻って来る。酔っ払いが、しなだれかかっているような趣である。事実、Carolは酒も飲んでいる。気がかりな様子のRachelが、受話器を耳に当てたまま、面談室に入る２人を横目で追う。心なしか電話の応対も素っ気ない。

面談室のベッドに寝かせられたCarolは、途切れ途切れに９歳になる子供のことを口走り、口づけさせてくれとAlanに迫る。Alanは、Carolの髪

を優しく撫でながら、眠らせまいと必死に語りかける。ドア口に立って、そんな２人を冷ややかに見つめている Rachel にも気づかない。Rachel に呼びかけられても、即座に反応することすらできない。何か言いた気な Rachel も、諦めて命じられるまま水を取りに行く。Rachel のいない隙に、Alan はいとおしそうに Carol に口づけをする。吐きそうだという Carol の上体を抱き起こしているところに、Rachel が水を持って戻って来る。優しく声をかけながら懸命に水を飲ませようとする Alan と、黙ったまま傍観する Rachel。２人の姿態の落差が印象的な場面である。Alan の努力も甲斐なく Carol は眠ってしまう。単に酩酊して眠ったのか、薬による昏睡なのか判別はつかない。自殺未遂に懐疑的な Rachel は、Alan が冷静に判断できないのは Carol に魅了されているからだと言う。Alan に返すことばはない。かろうじて、家庭を犠牲にするつもりはないと弁明するが、そのことばに力はない。わだかまりのとけない Rachel を抱き寄せて口づけをするものの、先刻見せた Carol への気迫のこもった口づけとは明らかに違う。おざなりな印象が拭えない。愛していると互に交わすことばがうつろに響く中、救急車の到着を告げる Muriel の台詞で第１幕が終了する。

第２幕は、Samaritans 事務所が舞台の第２場を挟んで、第１場と第３場は公園が舞台となる。第１場は、事務室部分が公園に転換され、下手に花の咲き乱れる生垣、舞台中央寄りに正面を向いたベンチが設置されている。第３場は、面談室部分が取り払われ、舞台全体が公園となる。

２幕１場　公園の一角。数週間後。

ヘッドホンをした Carol が、観客と向き合う形でベンチに座っている。マリファナを吸い、身体でリズムをとりながら大声で歌っている。Oasis である。Alan が登場し、その様子をしばらく見つめた後、Carol と少し離れてベンチに腰を下ろす。見知らぬ者どうしが居合わせた格好である。Alan は、Carol の差し出すマリファナを受け取る。人目を気にせず堂々と吸っている Carol とは対照的に、Rachel に内緒で来ている Alan は、左右に目を配

り、一瞬躊躇する。その後、身体をよじって、観客に背を向けて火をつける。知り合いに見咎められるのではないかと案じるこの所作は、幕間で注意の弛緩した観客を、演技空間に誘い込む効果的な趣向である。２人は視線を交わすことなく、生垣の花について話し始める。気詰まりな空気が取り払われると、Alan は、Carol の自殺が狂言であったことを何気なく指摘する。Carol に悪びれる様子はない。人目をはばかっていた Alan も、彼を挑発する Carol のペースに次第に巻き込まれ、Carol と声をそろえて歌いだす。そして求められるまま、Carol をカリブ海への空想の旅に連れ出す。Carol が着ている洋服、空港そして機内での様子、ホテルの床板やベッド、さらには窓からの眺めなど、こと細かに描写される。やがて、２人はベッドに横たわり、服を脱ぎ、絡み合う。正面を向いたまま、ことばの醸し出す夢幻に陶酔する２人の姿は、テレホン・セックスを彷彿させる。夢と現実とが交錯する世界を破って、不意に Carol が立ち上がり、彼女に命じられるまま、Alan も立ち上がる。そして、互いに向き合い、直立不動の姿勢で唇だけを寄せ合う。これは、Carol が以前 Alan に語って聞かせた夫との性生活の再現である。ゆっくりと溶暗するライトが、観客にそのことを思い起こさせる。

２幕２場　ロンドンの Samaritans 事務所。

面談室で、すでにスニーカーをはいた Peter がベッドを整えている。Muriel が、その手際のよさと出来栄えを誉める。Peter は、家では不安で眠れないが、ここに来るとぐっすり眠れる、さらに、ここに来るようになって薬を大量に飲むことも、自分を傷つけることもなくなった、と Muriel に感謝する。そして、見送りはいらないと言って帰って行く。その足取りは、軽やかである。

事務室では、Rachel が深刻そうな表情で電話に向い、必死に住所と電話番号を聞き出そうとしている。相手は、試験のプレッシャーと失恋の痛手から睡眠薬自殺をはかった17歳の少年である。Rachel の受け答えから、少

年の意識が朦朧としていることがわかる。Rachel は、逆探知の許可を求めるが、得られない。まもなく応答がなくなり、緊張した空気が事務室を駆け巡る。Alan は、助けて欲しいという心の叫びが聞こえたら、たとえ許可がなくても逆探知すべきだと主張し、17歳の少年だからなおさらであると言い切る。長年の経験による判断を重視すべきだとする Alan に対し、Rachel は、本人の意思を尊重するという The Samaritans の規則を遵守する立場を貫くが、心穏やかではない。半ば自分を納得させるように、逆探知したくてもできない苦しい心境を訴える。１度でも相手の許可なく逆探知をしたり、警察や医師に通報したりすれば、人々の信頼を失うことになり、組織としての存続が危ぶまれることになると力説する。そこへ、事務室の重苦しい空気を破って、Carol が Alan の名前を呼びながら入って来る。Carol は、幻のカリブ海への旅立ちの際に Alan が推奨した白い膝丈のドレスを身にまとい、執拗に Alan との面談を求める。先ほどまで声高に自説を主張していた Alan は、再三の呼びかけにも押し黙ったままである。突然の沈黙が、内心の動揺の大きさを物語る。Carol が面談室に引き上げると、Rachel は黙ったまま、鋭い目つきで Alan を見据える。舞台奥で正面を向いて立つ Rachel の視線は、観客に Rachel と感情を共有することをうながし、この場の重苦しい雰囲気に観客を誘い込む。その結果、舞台手前にいる Alan は、Rachel と観客の双方に応答を求められることとなる。前後から挟み撃ちにされた格好の Alan は、自分は面談しない方がよいだろうと重い口を開く。孤立無援の Alan は、Rachel が面談することを不本意ながら承諾する。

面談室のベッドに座った Carol が、ドレスの裾が膝にかかるように身づくろいしながら、いつになく神妙な面持ちで Alan を待っている。そのいじらしいしぐさは、Carol の失望を予見している観客の注意を喚起し、劇的アイロニーが緊張感を生む。Rachel が入ってくると、Carol は信じられないといった口調で、Alan は来ないのかとたずねる。Alan が自分の意思で面談

しないことを知らされると、Carol の失望は怒りに変わり、意気地なしの助平野郎に裏切られたと口汚く罵る。ことばを濁して Alan への個人攻撃をぼかす巧みさに、Carol のしたたかさがのぞく。さらに、怒りは Rachel への敵愾心となり、Carol は幻の旅行について自慢し始める。Rachel の無知をあざけるような口ぶりである。しかし、幻の旅行が、実は Alan と Rachel との現実の旅行の再現にすぎなかったことを思い知らされる。幻がだめならと、Alan 好みの洋服をひけらかすものの、追い討ちをかけるように、正札がついたままであることを指摘される。意気消沈した Carol は、公園に話題を移す。そして、Alan と会った事実は伏せたまま、出し抜けにナイフに話題を転換し、持参したナイフをテーブルの上に置く。ここは、期待と幻滅の間で引き裂かれる Carol の心理の機微に鋭敏になっている観客の反応を巧みに操る場面である。追いつめられた Carol が、切り札の Alan との逢引を暴露すると見せかけて、観客に肩透かしを食わせる。その結果、観客は Carol の唐突な行動の理由を求めて、ナイフの付加的意味を模索する。模索するのは Rachel も同様である。Rachel は、ナイフを見つめたまま、現在の心境を聞く。しばらく考えたあと、Carol は過去の惨めな体験を語り始める。虚勢の後ろにある、自分では癒すことのできない、傷ついた過去が次第にあらわになると、ナイフが象徴的な意味合いを帯びる。Carol は最初の子供を死産している。狂言自殺の際、うわごとで口走った子供である。Carol は、死んだ子供を産み落とす悲しみ、病院の心ない対応、そして、その時経験したやり場のない怒りを切々と訴える。強靭な生命力を感じさせるロンドン訛りのためか、Carol のことばには、相手の注意をとらえて離さないものがある。Carol の傷つけられた自尊心と心の傷の深さは、聴き手の感傷的反応を呼び覚ます。Rachel が心を動かされて涙ぐむと、Carol は、Rachel 同伴でもよいから公園で Alan に会わせて欲しいと泣きつき、切り札である Alan との逢引を匂わす。その思わせぶりな口調から事実を悟った Rachel は、Alan と落ち合う時間を決めなさい、と言い置いて彼を呼びに事

務室に戻る。ライトが溶暗して面談室が闇に包まれると、観客の情感は闇の中に取り残される。

事務室に戻ったRachelは、Alanに用件だけを手短に伝える。唖然とするAlanは、言うべきことばが見つからない。Rachelに急き立てられて、Alanは面談室に向かう。

溶明するライトに浮かび上がるのは、観客の脳裏に残る心もとないCarolではない。Carolは、何事もなかったかのように明るくAlanを迎える。Alanは、開口一番、Rachelに秘密を暴露したことを非難し、Carolに惑わされていた自分を自嘲的に振り返る。しかし、Carolに言い寄られると、Carolへの思いを捨てきれない内面が顔をのぞかせ、煮え切らない。優柔不断なAlanに対して、Carolは果断な行動に出る。Alanに抱きつき、堰を切ったように口づけをし、股間をまさぐり、ズボンのチャックを下ろす。堪りかねたAlanがCarolを突き飛ばすと、Carolはテーブルに置かれたままのナイフを手に取り、Alanに向けて突き出す。Alanはナイフを見つめたまま、ことばが出ない。冒頭で見た場面の再現である。一瞬躊躇したのち、Carolはナイフを自らの胸に当て、着ているドレスを切り裂く。幻の旅行の時と同様に、ドレスの下には何も身につけていない。そして、ナイフを手にしたままベッドの端に腰掛け、放心したようにうなだれ、Oasisの歌を口ずさむ。精神が錯乱しているのか、Alanに拒絶された腹いせの狂言か、判別はつかない。思いがけない展開に、Alanはただ呆然と立ち尽くしている。そこへRachelが顔を出す。Rachelは、Alanに向けられたナイフを見て、直ぐ事務室に引き返す。ここから、事務室と面談室の照明の明るさが均等になる。

Rachelが警察に通報する間に、Murielが面談室に入る。茫然自失のAlanを尻目に、Murielはこともなげに Carolからナイフを取り上げ、寒さに震えるCarolを毛布でくるみ、優しく語りかける。Murielの質問１つ１つに従順に答えるCarolに、精神的な錯乱は見られない。Alanはそっと退室す

る。Muriel が、切り裂かれたドレスを脱がせて買い置きの洋服を着せる頃には、普段どおりの Carol に戻る。

一方、事務室では、警察沙汰にしたくない Alan が、Carol の自宅に電話して母親と連絡をとるべきだと Rachel に告げ、事務所には登録されていない番号を教える。Rachel の知らない Alan の秘密がまた１つ明らかになり、２人の間にますます気まずい空気が漂う。やがて、警察官が到着するが、Muriel から Carol が落ち着いているという報告を受けた Rachel も、警察沙汰にはしないことにし、Carol を自宅まで送り届けるように依頼する。[11] Muriel サイズのためずり落ちそうなスカートを手で抑え、Alan は助平野郎だから気をつけた方がよいと Rachel に忠告して、Carol は警察官に無駄口を利きながら意気揚揚と帰って行く。

電話の応対に忙しい３人を事務室に残して、Rachel は１人面談室に向う。ベッドに腰掛け、肩を落としてうなだれる姿は、つい今し方見た Carol を思い起こさせる。ライトが溶暗し、Carol の複雑な心理に翻弄される長い場が終わる。

２幕３場　公園の一角。数週間後。死産した子供の命日。

ベンチに座ってゲームボーイに没頭する Tracy の脇で、生垣の花の根元に花を添える Carol。やがて、Carol もベンチに腰掛け、買物リストに目を通す。そこへ、Samaritan の資格を剥奪された Alan が登場する。Carol に無視される Alan は、Tracy に話しかけ、携帯電話の番号を書いたカードをベンチに置く。Carol が Tracy を伴って、その場を去ろうとすると、Alan は強引に Carol を引き止め、これからも時々会って欲しいと懇願する。立場が逆転した Carol は、その訴えに対して、階級間の敵意を剥き出しにしたののしりで答える。そして、カードには目もくれずに退場する。取り残された Alan は、カードを Carol が添えた花の横に一旦置くが、思い直してポケットにしまう。傷心の Alan が肩を落としてベンチに座り込み、ゆっくりと頭を抱えて幕となる。

Ⅳ

The Good Samaritan は、ドキュメンタリー劇風の部分と家庭劇風の部分が渾然一体となって、The Samaritans の活動の一端と、活動の抱える問題の断片を舞台上に再現する作品である。前者は活動の実態を主な題材とし、ドキュメンタリー的要素を豊富に取り入れることでフィクションとしてのドラマの「真実」を発揮させ、このような組織の社会的意義を訴えている。その手法は、公演のチラシやプログラムなどで作者 Haig の Samaritan 歴を知る観客が抱く、舞台上の出来事は完全な虚構ではないとする先入観と相まって、一層その効果が高められている。一方、後者は相談事業のはらむ危険性を題材とし、活動を歪曲した事例を描いている。その際問題となるのは、虚構化された出来事の信憑性を裏付ける観客の先入観が逆効果となり、劇的真実が歪曲した虚構を吸収し、Haig の伝えたい「真実」から遠ざかるという皮肉な現象を生み出すことである。*The Good Samaritan* の公演プログラムには、この点を危惧する１文が記載されている。Chad 牧師の写真と共に、見開き２ページに亘る The Samaritans の紹介の片隅に、本公演には The Samaritans の規則ならびに活動にそぐわない個所がある、と太字で但し書きがついている。事実、劇構成は必ずしも成功しているとは言えない。

劇評は賛否両論で、ねじれ現象を起こしかねない設定をあげつらう酷評から、人々の善意の延長線上に潜む危険性を、大胆な方法で取上げたとする好意的な賞賛に至るまでさまざまである。しかし、いずれの場合も、Carol を演じた Claudie Blakley を絶賛していることからも明らかなように、上演の成功は、彼女の好演に負うところが多い。彼女は、家庭劇の部分を担う旗頭として、不自然な設定にもかかわらず説得力のある舞台にした功労者である。劇の虚構の中に描き出される Carol の現実と、その中で演じている虚構をぼかしてしまう Claudie Blakley の表現技術が、構成の欠点を隠蔽

している。また、書き込みの足りない Alan の内面も、Carol の気迫に圧倒される形で補足されている。

一方、Muriel を演じた Polly Adams を賞賛する声も多い。彼女は、ドキュメンタリー劇の部分を担う旗頭として、重い課題を前にして楽しく笑える雰囲気を作り、希望と不安が交錯する事務所を人間的交流の場にしている。Claudie Blakey と Polly Adams の好演によって、Hampstead Theatre にふさわしい考えさせられる印象的な作品に仕上がったと言える。そこで最後に、この２人の卓越した表現技術を念頭に置いて、混在する要素がきしみ合う状況の中で提起される問題について考えてみたい。

精神的危機に追い込まれた人たちと、生きる喜びを見出して欲しいと願う人たちの織り成す世界は、相談事業の諸相を映し出している。ドキュメンタリー劇の部分では、登場人物の質疑応答に類した会話によって、The Samaritans の規則とその社会的意義を紹介するかたわら、Peter を活動の有効性を証明する症例として舞台に登場させている。また、舞台上の登場人物が支配する空間の向こうにいる、見えない相手との会話によって、電話相談の実態を伝えている。多種多様な相談内容に対応する相談員の根気の良さはもとより、別人を装って何度もかけてくる人や、日に数回かけてくる人、いたずら電話、そして無言電話に対応する相談員の苦悩も鮮明に描かれる。

電話の相手は視覚的な言語も聴覚的な言語も持たないが、この舞台を構成する重要な登場人物に変わりはない。人のぬくもりを求めている彼らの姿は見えない。また、彼らの抱える悩みも、相談員の一方的な受け答えの中で表現されるだけである。このように彼らの演劇言語を大きく制約する手法は、舞台装置の壁の外側にある演劇空間を想像する柔軟性を観客に求め、彼らの存在を観客に鋭く意識させる効果がある。繰り返しが多く、退屈な部分もあるが、それがかえって不安を抱いた孤独な人々の多い現実として迫ってくる。人と人とのつながりが希薄になっている実状を訴える一

方で、電話の向こうにいたLouiseを舞台に登場させて観客を楽しませる手法は鮮やかである。

電話の向こうにいる人々の存在が浮び上がると同時に、彼らの持つ主導権も鮮明に伝わってくる。電話をかけたい時にかける、切りたい時に切る、話したい時に話す、というかけ手の主導権は、電話相談の大前提であることは言うまでもない。しかし、切るに切れない無言電話や、長々と話し続けるいたずら電話を相手にする相談員の様子は、この前提が逆に相談員の心理的負担を増大させ、活動を制限し、緊急に必要としている人々からの電話がつながりにくくなる実状を浮き彫りにする。そして、かけ手の主導権を適切に行使して欲しいと願う作者の声が聞こえてくる。

電話相談の限界を超える倫理的な問題も提示される。電話で死を告げる少年に対して、規則を優先させるか個別に対応すべきかと議論する場面は、The Samaritansの原則の正当性を訴えている。その際、救ってやれば少年に感謝されるとするRachelの言い分に疑問を挟むMurielが、Carolの場合はJennyの疑問に答えずあっさりと救急車を手配している。一貫性を欠いた対応の仕方をことさら強調した作者の意図は推測の域を出ないが、敢えて疑問を投げかけることで、尊厳死の問題も含めて観客に考えるべき問題を提示したのではないかと思われる。しかし、作者の立場ははっきりしている。The SamaritansにたいするHaigの絶大な信頼は、圧倒的な存在感を持って迫ってくるMurielの人物像を通して明確に感知できる。

Murielを中心とするドキュメンタリー劇の部分は、電話相談を利用する人々に対する作者の切実な要望が盛り込まれていると言える。同時に、あまり知ることのない相談事業の実態を、演劇を通して観客に垣間見せている。そうした意味でも、*The Good Samaritan*は貴重な公演である。

一方、家庭劇の部分は、内容的には陳腐な不倫の話で、しかも登場人物の掘り下げが足りない。しかし、家庭の居間をボランティア活動の事務所に移し、善意という不確かな材料を盛り込んだ新鮮な観点は注目に値する。

Alan の善意は、劇の進行と共にそのあいまいさを露呈し、最後に残るのは階級間の緊張だけである。Alan には標準語を話させ、Carol には徹底してコックニーを話させていること、またそれぞれの異なる音楽の趣味も、両者の属する文化の明らかな違いを示している。文化の違いは、随所に盛り込まれている階級意識の強い表現にも表れている。さらに、ボランティア活動をする Alan を、よりよい人生を求める、生活にゆとりのある中産階級の代表とすれば、死産した子の亡霊に悩まされる Carol を、存在しない未来を夢見る、人生に絶望した労働者階級の代表と捉えることができる。最後に Carol は、Alan の善意をまやかしと断定し、中産階級に対する侮蔑を明日への活力に転化して、再出発への一歩を踏み出す。

ここで問題となるのは、善意がまやかしと化す過程である。Carol に魅了される Adam の転落の要因を突き詰めていくと、The Samaritans の原点を忘れた彼の過ちが見えてくる。Carol に言い寄られる場面で、Alan が自嘲気味に "my job is just to listen" (87) と語るように、Samaritan の仕事は「聴くこと」である。悩みを解決することではない。本分を忘れた Alan は、傲慢の罪を犯す。罪を導くのは、The Samaritans の規則を無視する彼の独善である。Carol を救えるのは自分しかいないと思い上がる Alan にとって、Carol は人間の傲慢を罰する女神ネメシスであると言える。

相談者と相談員の歪曲された関係は、The Samaritans の規則を遵守しなかった場合に起こり得る事態として提示される。不自然な状況が繰り返されるが、Claudie Blakley の熱演によって、不自然さが影をひそめ、代りに Chad 牧師の定めた規則の重要性が強調される。また、Alan の転落は、聴くという行為が、誰にでもできるものではないという事実を浮き彫りにする。

家庭劇の部分の受け取り方によって、*The Good Samaritan* の評は大きく分かれる。Chad 牧師の規則が守られている The Samaritans に対する敬意と捉えた場合は、ドキュメンタリー劇の部分とのきしみは気にならないが、

逆に The Samaritans に対する警鐘と捉えた場合は、そのきしみが大きく響くことになる。いずれにせよ、人と人が支え合っていける社会を切望する Haig のヒューマニティが鮮明に伝わってくる作品である。

注

(1) National Office for Statistics 発表の1999年度の数値である。

(2) ここに挙げた自殺未遂者の概数は、救急病院に運び込まれたケースをもとにした数値である。個人医院、家庭医による応急処置を含めた実数はこの数倍になると予想される。

(3) 警察庁の統計による。

(4) 2001年12月４日毎日新聞（朝刊）：27。

(5) David Haig は、*The Good Samaritan* の初演の１ヶ月後に Royal National Theatre で開演した Alan Ayckbourn の意表をつく遊び心満点の意欲的な新作 *Garden* と *House*（２作同時上演）に主演して好評を博した。

(6) 「ルカによる福音書」10：25－37。

(7) Chad Varah, "How and Why I Started the Samaritans," *History of the Samaritans* : n. pag., online, Internet, 23 Oct. 2000.

(8) 作品紹介にあたって下記のテキストを参照したが、上演に際して舞台装置に変更が見られた。テキストのト書きには、事務所空間を挟んで舞台の左右に面談室１と面談室２が予定されているが、今回の上演では、面談室１は下手奥にそのドアがあるだけで、面談に使用されるのは、面談室２のみであった（本文参照）。この変更により、面談室１に引き続き面談室２を使用する予定の１幕２場が、テキストのト書きとは若干異なる演出となった（本文ならびに注(9)参照）。David Haig, *The Good Samaritan* (London: Nick Hern Books, 2000).

(9) テキストでは、Muriel と Louise が下手の面談室１、Alan と Carol が上手の面談室２を利用する演出を予定しているが、舞台装置の変更によって面談室が１室のみとなったため、一旦照明を落として俳優の入れ替えが行われた。そのため、時間的経過が暗示される結果となった。なお、テキスト通りであれば、２つの面談室の空間的な距離のもたらす視覚言語と、中断されることなく提供される聴覚言語が相まって、より鮮明な対照の効果を生み出したのではないかと思われる。

(10) Carol がここで‘Chinese game’と称して語る、曜日毎に触れ合う範囲を広めていくセックス・ゲームは、２幕１場で Alan に求めることばによる陶酔、手を使わない口

づけの布石となっている。

(11) 本公演では、Louise と Peter を演じる２人の俳優が、ここに登場する警察官を演じている。肯定感を求めて面談室に通う自信のない警察官と、ゲイであることを打ち明ける勇気のない警察官という設定は、興味深いものではあるが、作品を読む限り、作者がこの一人二役にこのような付加的な意味を持たせたとは考え難い。単に、上演上の物理的な都合ではないかと思われる。今回の上演においても、観客の注意をこの配役に向けるような演出は見られなかった。